

第十回

ふるも七也の詩

— 受賞作品集 —

羽 生 市

## 募集にあたって

「四里の道は長かった。その間に青縞の市の立つ羽生の町があった。田圃にはげんげが咲き、豪家の垣からは八重桜が散りこぼれた。」で始まる田山花袋の小説『田舎教師』の作中において、成願寺和尚山形古城の名で登場する太田玉茗は、明治詩壇前期において、島崎藤村や国木田独歩とともに、日本の近代詩史に名をとどめた新体詩人の一人でありました。

この太田玉茗を顕彰するとともに、詩の素晴らしさを全国のみなさまに伝え、詩を通して文化の発展の向上に寄与することができればと考え、新体詩人のふるさとの地でもある羽生市が、「ふるさと」をメインテーマに「詩」の全国募集をおこなったものです。

目次

◎受賞作品集

|       |    |   |   |   |                                  |
|-------|----|---|---|---|----------------------------------|
| 太田玉茗賞 | 一篇 | 故郷の家 <small>ふるさと</small>                                    | 横須賀 武 弘   | 埼玉県羽生市……………   | 6                                |
| 宮澤章二賞 | 一篇 | 父さん、ふるさとへと帰る。   | 石川 厚 志  | 埼玉県比企郡小川町……………  | 10                               |
| 優秀賞   | 五篇 | 春の障子<br>豊のへこみ を<br>オリオン座<br>「寒立馬」<br>津軽へ                    | 梅山 憲 三<br>江端 芳 枝<br>大釜 正 明<br>塩田 友美子<br>中村 明 美        | 三重県いなべ市……………<br>静岡県磐田市……………<br>東京都江戸川区……………<br>神奈川県横浜市……………<br>埼玉県坂戸市……………                | 14<br>16<br>18<br>20<br>22       |
| 佳作    | 十篇 | ばあちゃんのスパゲティ<br>「地を搔け」<br>家<br>帰宅<br>市営団地へ、いざ<br>杉っ皮の屋根に抱かれて | 鶴巻 大<br>春日 重 信<br>斉藤 礼 子<br>島田 奈都子<br>竹田 竹 藏<br>巴 希 多 | 宮城県仙台市……………<br>埼玉県北本市……………<br>岐阜県可児市……………<br>埼玉県久喜市……………<br>愛知県愛知郡東郷町……………<br>埼玉県川越市…………… | 26<br>28<br>30<br>32<br>34<br>36 |

市民奨励賞 三篇

蝶の飛ぶ日  
町のおい  
大きな藁屋根  
ちやぶ台

中本 百合枝  
服部 誕生  
水野 浩子  
石木 充子

兵庫県神戸市……………38  
大阪府箕面市……………40  
東京都府中市……………42  
広島県三次市……………44

音

渡り鳥

雀

加藤 諒  
金森 孝枝  
小林 伊月

埼玉県羽生市……………48  
埼玉県羽生市……………50  
埼玉県羽生市……………52

◎ 講 評

「ふるさとの家」と家庭生活

菊 田 守

◎ 選考委員紹介

菊 田 守 木 坂 涼

◎ 推薦委員紹介

北 岡 淳 子 北 畑 光 男 長 嶋 南 子

山 田 隆 昭

◎ 資 料

経 過  
募 集 要 項  
応 募 状 況



第十回

ふるきと詩

太田玉茗賞

ふるさと  
故郷の家

横須賀 武 弘

玄関をあけると  
そこには十年の時間が静かに  
眠むっていた  
両親が亡くなり  
誰も住まなくなつた故郷の家  
山あいの小さな集落の一軒家  
もうすぐ取り壊わすことになるその家を  
妹と二人で訪ねたのは先日のこと  
長い間お世話になつた近所への挨拶と  
最後の片付け  
手つかずの遺品を目にすると  
やはり懐しさがこみあげてくる  
ぼくがこの家を出てから三十年  
妹が他県に嫁いでからも  
もう二十年以上の時間が流れた  
その間いくどか同居を勧めたが

とうとうここから離れなかった二人

廊下を歩いて茶の間に入ると

湿めった畳の匂いが鼻を突く

ねえ　これ見て――

妹に促されて目にしたのは

古い柱に刻まれた自分たちの成長記録

まだ一メートルにも届かないところに

妹の名前　その上にはぼくの名前

それがほぼ同じ間隔で上に伸びている

途端に黙りこみ　鼻水を啜る妹から

慌てて顔をそらせたのは

ぼく自身の後ろめたさだったのか

もうすぐ取り壊わす故郷の家

そうすることの一つのけじめを

つけるはずだったのに

何故かあの日からポツカリと

空いてしまった心の空洞を

埋められない　ぼくがいる





第十回

ふらふらの詩

宮澤章二賞

# 父さん、ふるさとへと帰る。

石川厚志

満月の晩、野を走り丘を越え、幼い君たちを残す、父さんのふるさとへと帰る。単身の赴任先から、背中にちよつぴり暗闇でも背負いながら。父さんの、普段の暮らしぶりなど、口にはできまい。辿り着くと玄関先に、パンクしたままの、娘のぺしゃんこ自転車置いてある。隣りに、首を寄り添うように、泥だらけの息子の三輪車。一緒に暮らしていた頃には、皆連なつて、この先のちよつぽけな公園へと、行ったのだね。軒下には、朽ちかけたツバメの巢。我が家とともにあつた。夏の初め、一羽、また一羽と巣立っては、家の前の電線に並んでゆく。番いの父さんと母さんの、それまでの苦労といつたらまあ、それはもう。満月の晩に、巢の縁につかまって、中の子たちを見守りながら、寝るのだよ。扉を開けると、息子が立っている。パンツ一丁の、お出迎えか。やおら、手に持つおもちゃの説明などしてきて。父さんはそこに棒立ちのまま、中へも入れないではないか。居間へとゆくと、娘がランド

セルに、五年生の教科書などを入れ、明日の準備などをしてゐる。覚えてゐる。君が初めて登校をした、あの日のことを。赤いランドセルを父さんは、いつまでも、いつまでも、見送った。母さんは、お風呂に入っている。シャワーの壊れたままの。父さんは、郵便物を取りに來ただけ。明日も仕事。もう、帰らなければなるまい。台所に、皆の鍋を残して。皆で、和気あいあいと突いた、鍋を残して。帰る頃には、嘗て川の字に寝ていた畳部屋で、布団に包まり、首を寄せている娘と息子。二人で、布団の隙間から目を覗かせ、「あと三つ目の日曜日に、遊園地へ、連れていってくれるんでしよう？」と。唇を噛みしめて、君たちは、そう、ゆうのだね。玄関の扉を閉め、そこにもたれて、溜め息をひとつつく。空を仰げば、満月が溢れていて、それはもうまるで、皆で突いた、あの鍋のように。



第十回

ふるせいの詩

優  
秀  
賞

# 春の障子

梅山憲三

「今度は女の子らしいわよ。」  
と妻が、心配そうに話しかけてくる

四十歳になる前に長女は  
一千グラムにも満たない男の児を産んだ

ドウカ 体重が増エマスヨウニ  
歩ケルヨウニ ナリマスヨウニ

どうにか歩けるようになり  
笑顔も見せるようになった矢先  
二人目の児を妊娠した

今度ワ 早く出テキマセンヨウニ  
血圧モ 高クナリマセンヨウニ

正月は来ないと電話してきた

悪イ病氣ニ 懼リマセンヨウニ  
産ミ月マデ 体ヲ壊シマセンヨウニ

予定の日は四月の半ば過ぎ

庭ノツツジノ花ガ 咲イテイルカナ  
柿ノ木ノ芽吹キガ 始マツテイルカナ

何かできることはないかと

黄ばんだ障子を張り替えた

新年を迎える準備だよと妻には言っ

出産のことは口にしなかった

娘が女の児を抱いて帰って来たとき

障子ガ キレイニナツタネ

部屋ガ 明ルクナツタネ

と、気づくだらうか



# 畳のへこみを

江  
端  
芳  
枝

部屋はからっぽで  
四角いだけだった  
八枚の畳も  
かっきりと四角い

学校から帰ると  
母の鏡台がなかった  
弟のおもちやがなかった  
母と弟がいなかった

縁側からの陽射しに  
一か所だけ  
畳がへこんでいるのが見えた

そのまま  
母も父も弟も  
帰らず

祖父母との三人暮らしになった

祖父の膝の上は

いつでも温かく

祖母の背中は

どこまでも柔らかかった

が

時々

からっぽで四角のままの部屋で

母の鏡台が 残していった

畳のへこみを

こっそり

さわっていた

# オリオン座

大釜正明

林の中に切り拓かれた小高い丘  
そこにぼくの家、ぼくらの施設があった

寮の風呂当番の日

「今日は北寮の人から入ってください」

弟の孝がお風呂の順番を知らせて回る

「児童は、よい環境のなかで育てられる」<sup>※</sup>

戦後の子ども観の草創期に建った寮の夕方

「なんで本を見ながら風呂焚いてんの」と弟

「ちよつと、ほら、金次郎のまね」

「フーン」と言いながらコークスをくべる

貧しいけれど みんなが背伸びしていた

寮母先生の配慮で

四季折々、里山の自然が持ち込まれた

五月の風呂には菖蒲が香を放っていた

菖蒲採りに参加できた時は鼻が高かった

七夕の笹竹はお寺にいただきに行った  
大きな笹竹をみんな得意揚揚担いで来た  
「父さんがいたらなあ」  
と書かれた短冊がまぶしかった

寮から村道に出る手前には、溜池があり  
氷が厚くなると  
下駄スケートのリンクに早変わり  
暗くなるまで透き通った歓声を上げていた

寮の風呂が修理となり隣町の銭湯に行った日  
帰りに「子ども夜回りをしよう」と  
寮母先生から拍子木を預かっていた隆さん  
「火の用心」（カッ カ）「火の用心！」  
「焼餅やいても 家焼くなあ！」（カッカ）  
村の夜警の真似等しては ゲラゲラ：

みんな頬を真っ赤にして声勢ませていた  
空にはオリオン座が輝いていた

※「児童憲章」（1951・5・5制定）

# 「寒立馬」

塩田友美子

その馬は青森に住む  
寒立馬は大きく動くことはない  
しかしその存在感は圧倒的だった  
話すことで自己を主張する  
そんな人間が小さく見えた  
厳しい冬にも耐える  
屈強な体を持つ  
それに見合う精神さえ  
身につけているようにも思える  
なにも言わず  
なにも押し付けない  
しかしどこか寂しく  
美しくて尊い  
冬になると父と母の顔が浮かぶ  
今もふたりであの家にいる  
私の生まれた場所に

屋根雪に玄関に庭

いつまであの深い雪を

ふたりはかたづけられるのだろうか

帰省のたびに雪かきを手伝う

ふるさとの雪は重い

こんなに重かっただろうか

水分を含んでいるせいか

それとも私の衰えか

飛行機の窓の外に目をやる

屋上に黒いコートを着た

女性が小さく見える

「見送りはいいはんで」

そう言ったのに

吹雪の中

半分白くなりながら

母は寒立馬のように

そこに立っていた

# 津軽へ

中村明美

家に行って来たけど  
誰もいなかった  
柱に寄りかかって  
しばらく待ったけれど  
オドもアバもいなかった  
病院のベッドで  
母はそう言った  
窓の向こうは  
武蔵野の夏の盛り  
田畑が眩しく広がっている  
遠くで踏切の遮断機が鳴っていた  
オドに電話をすると  
昨夜は農協の旅行で  
アバと一緒に一晩留守にした  
そうか てるかが来たか

二階に寝ていたハジメは  
夜半に階段を  
上ったり下りたりする  
微かな足音を聞いた  
ああ　てるこだ  
てるこがいま　帰って来た

もう少ししたら  
もっと軽くなるから  
そうしたら父さんの  
背中におんぶされて帰る

もうおわり　これでおわり

母はそう呟いて  
本当に息を止めた  
そして飛び立ったのだ  
明け始めた八月の空へ  
潮風のひかるあの村へ  
あんなにも帰りたいかった家へ





第十回

ふる<sup>り</sup>也の詩

佳

作

# ばあちゃんのスパゲティ

鶴 卷 大

ばあちゃん家の定番はスパゲティ  
水っぽくてケチャップ味  
こげたウインナーとしんなりした玉ねぎ  
ティーブルの角で数回叩いて使う粉チーズ  
きんぴらや煮物のほうが美味しいと  
次こそ言おう この次こそはと思うけど  
言いそびれて黙って食べるスパゲティ  
料理の本を見ているばあちゃんの顔が  
あまりに真剣だから  
この次は絶対と言ってあげよう  
去年より美味しいよって

じいちゃんが亡くなってから  
一人暮らしをしていたばあちゃん  
僕たちと一緒に住むために家を取り壊した  
かやぶき屋根にシヨベルカーの爪が  
ガンガン ガタガタとあたるたびに

よかった よかったとばあちゃんは言つて  
涙を流した

じいちゃんと一緒に過ごした思い出が

消えていくのは悲しいことだろう

家を取り壊されると

裏のトウモロコシ畑が現れた

一面に並ぶトウモロコシは

じいちゃんが作ったものだ

風に揺れるたびにじいちゃんが

よかった よかったと言っているように

僕には聞こえた

大きな山のふもとにある小さな家

家はなくなつたけど

くしゃくしゃのじいちゃんの顔

みんなで囲んだ大きな囲炉裏

じいちゃんと食べた水っぽいスパゲティ

思い出は色あせることなく

僕の胸に刻まれている

新しい家に帰ろう ばあちゃん

# 「地を搔け」

春日重信

字を書くよりも地を搔け  
とは、私のふるさとに伝わる人生訓である。  
勉強より農作業の方が大事という意味だ。  
何よりも体を動かして働けということだ。  
町の中心から遠く離れた私のふるさとは  
実に交通不便な田舎である。  
校医は馬で峠を越えて来たという。  
念願の隧道が開通した時に  
文明の息吹を運んでくれる  
と、当時、村人は期待し喜んだ。  
どの家も朝昼よく働いた。  
しかし、父は世の中の舞台裏を知った。  
さきの戦争に兵士として出征し  
運よく生還できた父は  
世渡りには  
字を書くことが大切だと実感した。  
家に設置されたばかりのテレビの番組を

私は曜日ごとに完璧に暗記して

聞かれれば、すぐに答える事が出来た。

父は、笑いながら、そのくらい勉強して欲しいものだと嘆いた。

酒が好きで、楯火でよく立志も説いた。

自分は風雪に耐えて生きてきたとも言う。

大学受験に何度も失敗した私に

父は厳しい言葉を浴びせた。

少しは骨のあるところを見せろと。

学歴に劣等感をもつ父は

新聞を読む度に、難しい漢字を

その余白に書き出し覚えていた。

習字も手本を買い独学した。

私はこの努力家で挑戦的な父に

とても反発する気にはなれなかった。

その父は数年前に逝った。

ふるさとの美しい四季折々の風景は

事ある毎に胸に浮かび心を癒してくれる。

山は青く空気はうまい。

だが、私に努力することを教えてくれ

社会に送り出してくれた

父の姿こそがふるさとだと思っている。

# 家

齊藤礼子

わたくしの両手のなかに佇まう  
ちいさな家を  
くりかえし くりかえし  
思い出してやらねばならない  
オオバコの生えた野の道を歩き  
「ただいま」  
そう告げるように

榊の木の葉が 光のように屋根に降りそそぐ  
ふるさとの 遠い家  
その家の 北の部屋には  
わたくしの年老いた母がいるのだから

夜になると 母は鳥の巣のようなその部屋で  
古い日記帳を 読みかえしたり  
若い日にならった習字のお手本を  
なぞったりしながら

眠りにつくまでの  
長い時間をすごしているのだから

この家からいなくなった人たちを  
一人ひとり思いつつ  
遠いむかしを 啄んだり解したりしながら  
すごしているのだから

過ぎ去った日々は  
屋根に 積もっては消えていった雪のようで  
窓を鳴らした風のように  
廊下の 黒電話のベルにさえ  
ほろほろと ほどけてゆきそうな家だから

わたくしの両手のなかに佇まう  
この ちいさな家を  
くりかえし くりかえし  
思い出してやらねばならない  
わたくしを揺らした揺り籠のように思い出し  
老いた母のねむりを  
守ってやらねばならない



# 帰宅

島田 奈都子

生きている時と 変わらぬ寝姿  
白い花の香りが漂う 書斎に  
父は 帰ってきた

都会の小さなマンションの一室  
厚い硝子の向こうから  
くぐもった屋形船の音が ひびく  
ちろちろと瞬く光に見入るうち  
途轍もなく悲しい出来事も  
ほのぼのと溶けてゆくような  
錯覚を覚える

（お茶を いれましようか）  
だれかが つぶやき  
やがてあたたかな葉罐の吹く音が  
ふつくらとした 空気を 生む

ぎっしりと詰まった書棚の本

むさくるしい匂いも

今では ありがたい名残

入院する時 脱ぎすてたまのセーターを

膝の上で 時間をかけ たたむ

生きていた人の形を なぞる

それまでは

眼や耳で なぞってきた もの

この

家 と呼ぶには 手狭ながら

果物を剥きながら 音楽を聴きながら

たわいないことを

何度も何度も 談笑した やわらかな場所

お茶が入ったわよ

誰かが 父の 信楽焼の湯のみに

たつぷりとそそぎ

寝姿の傍らの 文机に置いた

お帰りなさい 父さん 我が家に

# 市営団地へ、いざ

竹田竹藏

こんなこともないと　もう二度と  
逢って話すこともないだろうと思っただから  
ぼくとぼくの幼馴染みたちが住んでいた  
市営団地へ、いざ

ケンちゃんのお母さん

「まー、立派になっちゃってえー」

ハタケーのお母さん

「あの頃が懐かしいねえ」

ブーちゃんのお母さん

「あー、その写真。持ってる、持ってる」

こちらからお願いしといてあれなんですけど

まあみんな話が長い！でもしょうがないよね

二十数年振りだもんね

みんな　ほんとよく生きていてくれた

「ここにねえ、住所と名前をー」

「ええ!?なんて?耳が遠くなつてねえ」

「こ・こ・こにねえ、こ・こ・こ見えるー?」

「目えも悪くなっちゃってねえ」

「ここに住所と名前を書いてほしいんだけどお」

「手えが奮っちゃって書けるかなあ・・・」

「ぼくが代筆しといてもいい?」

「ええ!?なんて?」

Yさん あなたが不運にも難病になり

i P S 細胞の研究に対しての助成金を

嘆願する署名活動を始めてくれたおかげで

ぼくはふるさとの家に帰ることができました

お母さんたちに逢うことができました。

市営団地には一戸建てにはない醍醐味が

みつつぐらいある

ひとつは友だちがすぐ近くにいるということ

すなわち目の前が公園ですぐ遊べるということ

そして最後に

お母さんがたくさんになるということ

# 杉っ皮の屋根に抱かれて

巴 希多

膝下に  
ゲートルを巻いた父が  
戦争から帰って来たのを待っていた家

生まれてすぐ死んだ赤ん坊に  
秋子と名前をつけて  
赤い着物で包み  
小さなみかん箱に寝かせて  
自転車の荷台に縛り  
墓に埋めに行く父を見送ったあの家

母は  
着物を脱ぎっぱなしにし  
いつまでも鴨居に下げていたので  
母が出かけると畳んで  
タンスに仕舞ったけれど  
畳み方が下手だと叱られた

でも  
この家は  
母ちゃんが居ないと  
家の中が奇麗だ

と  
近所の小母さんが笑った

日照りに焼かれても  
雪に埋まっても  
四人姉弟が育っていく日々を  
杉っ皮の屋根が  
両手を広げるように抱いていた

# 蝶の飛ぶ日

中本百合枝

表座敷の片隅でも言わず屋敷を守る  
鈍い銀の衣装缶だ  
祖母が入れた樟脳はすっかり溶けて  
セロファンだけが残るその衣装缶から  
夥しい数の蝶が舞い上がる

ああ 清々した  
これほど長らく閉じ込められていようとは  
表座敷に蝶が舞う  
祖母の生家の紋は揚羽  
その一つびとつを薄い和紙で  
丁寧に覆った祖母の心が  
解き放たれて天井に舞う  
目を凝らせば喪服の下に黒留袖も見える  
祖母がこの家に嫁いだ日に  
嫁入道具としてやって来たその蝶たちだ

廻り廊下のある大地主の屋敷から

こんな貧しい家に来て

どれほど戸惑ったことだろう

その蝶たちを宥め諫めて

祖母はこの隙間風の山裾の家で

八十余歳を生き切った

一つの紋に一枚の和紙で

祖母は何を閉じ込めたのだろう

袖を通されることもなかった幾枚もの礼装を

恐る恐る広げてみる

この家にはおよそ不似合な

上等な絹の感触に

わたしは思わず身震いする

祖母が立ち上がる

音もなく立ち上がって傍らに坐る

祖父亡き後の三十年を

たった一人で生き延びた祖母が

いま蝶たちを解き放ち

すっかり軽くなつて

白い姿で坐っている



# 町のおい

服部 誕

六甲山から大阪湾へと流れ下る二つの川に  
東西をはさまれたちいさな町には  
商売をしながら暮らす家がたくさんあった  
米屋と煙草屋を兼ねている茶舗では  
仕入れた茶葉を店の奥で焙煎していた  
ゆつくりと回る焙煎機の音は店先までひびき  
煎られた新茶の香ばしいにおいは  
ご近所中にひろがった  
畳屋からは青い藺草のにおいがしていたし  
かどの豆腐屋では朝早くから  
豆を蒸す湯気が流れていた  
花屋にならぶ季節の香りをかぎながら  
子どもたちは学校への行き帰りに  
立ち働くおじさんおばさんたちに挨拶した

その町は

一九九五年の地震でなにもかもなくなつた

今は新しく建てられた耐震住宅や集合住宅が  
小説にでてくる架空の町のように整然と並び  
再建された高速道路を走る  
自動車やトラックの騒音だけが  
乾いた街並みの上空を埋めつくしている

高校を卒業して家を出て以来  
長いあいだ都会で暮らしていた男は  
地震のあとしばらくして町にもどってきた  
いつかここでパン屋をひらきたいんだ  
香ばしいにおいのする焼きたてのパンを売る  
と男はわたしにむかって言う  
もうずっと昔のことのようだな  
町においがしていたのは  
とわたしを見あげて言う

地震でも倒れなかった公園のケヤキだけが  
二十年経って大きく育ち  
においのしない風のなかで  
根元に建てられた地藏堂をつつむように  
両手をひろげたかたちの葉叢の繁みを  
さわさわと揺らしている

# 大きな藁屋根

水野 浩子

向かいの山の坂道を登る

所々 雑木林の切れ目から光って流れる川

川沿いに続く家並みの真ん中を貫ぬく

まっすぐな国道

瓦屋根と藁屋根がまじり合う中で

藁屋根の一番高いのが目印だった

引揚船から降りたった焼け焦げた神戸の街

乗りこんだ列車の窓に真赤に燃えさかっていたのは

どこの街だったのだろうか

母子四人目指したのは父の実家

少年航空兵を志願した叔父

ひたすら待ち望んでいた出撃もないまま

突然に命じられた帰郷

日赤従軍看護婦として南方へ派遣された叔母

海をわたりようやくにたどりついた故郷の家

ニューギニアの激戦地で倒れた叔父

帰りたくても帰れなかった人は

白い包みの箱になって

帰省の度にいつも向かいの山に登った

雑木林の匂いに包まれて

木立越しに一番高い藁屋根を

確認して心が和んだ

みんなこの大きな藁屋根をめざして

帰ってきた

帰る家があって待つ人がいて

あれから何年たったのだろうか

みんなの抛り所になり

それぞれを送りだした藁屋根の家は

姿を消してただ平らな土地だけになって

残っていた

# ちやぶ台

石木充子

はるかな はるかな昔  
物心つく頃からの数多の記憶の底から  
浮かんで来る小さな家具  
茶色がかった黒くて丸い形のもの  
それは 古希を過ぎた今でも  
木目まで鮮やかに思い出せる一個のちやぶ台

ちやぶ台は  
どこに住むときも一緒に移動した  
雪深い山奥の一軒家にも  
川近くの町中の二階の間借り生活にも  
列車の音が聞こえる住宅団地の居間にも

ちやぶ台を朝晩  
父と母と妹の四人で囲んだ  
終戦直後の窮乏時代  
正油をかけた麦ごはん 塩コブのおかず

母が骨ごと叩いて作ったイワシの団子と白菜を煮た  
鍋が デンと

台の真ん中に置かれた日もあった

夕食後は そのちゃぶ台に

妹と二人で宿題を広げた

父も同じようにノートを広げた

いつか仕事の役に立つかも知れないと

独学で速記の練習をしていたのだ

ちゃぶ台は 私が大人になる前

どこかへ消えてしまった

大海を漂よう一艘の小舟のようなちゃぶ台

………

父には父の 母には母の 子には子なりの

それぞれの屈託を抱えながらも

ちゃぶ台で向かい合っていた日々

親子四人の濃密な時間と空間

あそこが私の故郷

あそここそ かけがえの無い私の故郷だった



第十回

ふるさと  
の詩

市民奨励賞



# 音

加藤 諒

「ただいま」

「おかえり」

私が帰るといつもむかえてくれる声  
部活から帰ってきた私を癒す声

「トントントン」

「グツグツグツ」

私たちのために料理を作ってくれている音  
毎日母ががんばってくれている音

「ブルルル」

「バタン」

私たちのために仕事をしてくれている  
毎日父ががんばってくれている音

なにげない毎日に

たくさんの音があふれている

私の家は幸せな音でいっぱいだ

# 渡り鳥

金 森 孝 枝

落下する瓦 払われる土壁  
露わになる家の骨格  
大梁を打つ槌の音  
百年の重みで裏返る

隙間に潜んでいた年月の砂塵  
渡り鳥の群れになり  
道に 裏の川 近隣の家々の屋根に降り立つ

挨拶を交わしたこともない人達  
永年の知己のように現れ 語る世界  
私はまだ存在していなかったり  
鬚を結った祖母が店番をしていたりする  
見たこともない高祖父や曾祖父  
臃気な像が 衣をまとい 動き出す

刀じゃ刺身は切れない

新しい家を己の手で  
高祖父の志 それまでの時代を脱ぎ捨てた  
名の一字を刻んだ鬼瓦  
大棟の天辺で朝日を受ける

十九歳の母の結婚式の日  
曾祖父は彼方へ旅立つ床の中  
養蚕業の始動と終焉 戦争をしのぎ  
遠のく高砂に 家の存続を唱えながら

のしかかった五世代の荷重  
ずれ始めた屋根 傾く塀  
現実の危険が郷愁を追いやった  
十日で消えた家  
残った三枚の鬼瓦  
「廣」文字はまだ明瞭な線を保っている  
再び掲げる日は来るだろうか

通る道 曲り角で遭遇する重機の唸り  
街の住宅図を一新する勢い  
翼に家族の逸話を抱き  
砂塵の渡り鳥が別れを告げている

# 雀

小林伊月

一年ぶりの母の家  
空き家になって何度目かの「ただいま」  
艶の消えた門扉を抜けて  
伸び放題の生け垣の影が途切れるところ  
柑橘好きだった母が  
不自由な手で植えた夏蜜柑  
煤けた硬い果実をたわわにつけている  
もいだ蜜柑の汚れをこすり  
すうと初夏の香りを確かめる  
育てることが大好きだった母  
育つものを愛した母  
丹誠込めた山桜桃<sup>ゆすらうめ</sup>を鳥に荒らされ  
「あーあ、食べられちゃったねえ」  
ころころと笑う背中が  
日溜まりに浮かぶ  
戸袋に雨戸をしまい

ガラス戸も窓も開け放つ  
抜け殻をめぐって風を迎える  
思い出をかき立てるにおいはとうに消えて  
鼻腔を乾かす静かな埃ばかり

火を忘れた台所

回らない換気扇からちっちっちっちと

忙しない鳴き声がする

重い引き紐を引いてみる

シャッター羽根がカタンと開くと声が止む

勝手口を下りると

換気窓フードの上に場違いな藁の塊

これは雀の巣

すぐまたはじまる雛鳥たちの腹へこ合唱

凍りついた静けさにはほど遠く

今もこの家から旅立てる命がある

まだまだここは母の家らしい



講

評

菊田

守



「ふるさとの家」と家庭生活

菊田 守

第十回「ふるさとの詩」——テーマ「ふるさとの家」は二十年目の記念の年となった。

選考委員は木坂涼氏と菊田守、推薦委員には前回同様北岡淳子・北畑光男・長嶋南子・山田隆昭の四名である。今回は一般応募作品が五二五篇、市民奨励賞応募作品は九五篇と応募があり、特に市民奨励賞の応募に強い関心があることが注目された。この中から、太田玉茗賞、宮澤章二賞（新設）と優秀賞五篇、佳作十篇、市民奨励賞として三篇を選考することとなった。

推薦委員会は三月十三日、浦和・さいたま共済会館にて開催。予め各推薦委員に配布された持ち分から一人二十篇程度を選び、北岡、北畑、長嶋、山田各氏の順に選んだ詩を読み上げ、選考委員菊田守が進行を勤め、最終的に一般応募作品五二五篇から八十篇、市民奨励賞九五篇から五篇が選ばれ、選考委員会に付託された。

今回のテーマが「ふるさとの家」ということから、ふるさとの家に実際に住んでいた家族、両親、兄弟姉妹、祖父母などとの実生活を素材とし、自らの体験を通しての喜びや哀しみ、楽しさ、苦しさを表現した詩が多かった。そのためか、作品が類型化し、似たような作品が多かったことも否めない。そのような中で、その人でなければ書けない個性が生かされた作品が選ばれた。これからのテーマは、ふるさとの花や昆虫など動植物をテーマに選ぶよよいと思う。

選考委員会は四月十六日、浦和・さいたま共済会館で開催。選考委員木坂涼と菊田守。推薦委員会で付託された一般八十篇の中から太田玉茗賞一篇、宮澤章二賞一篇、優秀賞五篇、佳作十篇を、市民奨励賞五篇の中から三篇を選んだ。八十篇の中から木坂涼委員と菊田守が、優秀作品を含め、先ず七篇を選び、その中から、太田玉茗賞、宮

澤章二賞を選ぶこととした。

「故郷の家」<sup>ふるさと</sup>、「春の障子」<sup>ふるさと</sup>、「畳のへこみ」<sup>を</sup>、「津軽へ」<sup>を</sup>、「寒立馬」<sup>を</sup>、「オリオン座」<sup>を</sup>、「父さん、ふるさとへと帰る。」<sup>を</sup>（応募順）の七篇をまず選出した。

ここで申し上げておくが、応募作品には一篇一篇に番号が付けられており、氏名は最後までわからない。

作品については木坂涼選考委員と菊田守が慎重な審議を行い、最終的に七篇の中から太田玉茗賞「故郷の家」<sup>ふるさと</sup>、宮澤章二賞「父さん、ふるさとへと帰る。」に決定した。

以下、各作品について講評をかく。

「故郷の家」<sup>ふるさと</sup>は、両親が亡くなり十年経った家を妹と二人で訪ねた。この家を出てから三十年、妹が他県に嫁いだから二十年以上経つ。廊下を歩き茶の間に入る。妹に促されて目にした、古い柱に刻まれた成長記録。まだ一メートルにも届かないところに妹の名前、その上には多くの名前、それがほぼ同じ間隔で上に伸びている、と書く。もうすぐ取り壊す故郷の家への思いがよく書けている。又、妹の背丈と自分の背丈が同間隔とは、幼い妹と「ぼく」の少年時代を見事に描き切っている傑作。

「父さん、ふるさとへと帰る。」

満月の晩に娘と息子、妻のいる家へ、単身赴任先から帰る。玄関先にある、パンクしたままの自転車、泥だらけの息子の三輪車。家の中に入ると息子が立っている。居間でランドセルに教科書を入れている娘。母さんはお風呂に入っている。父さんは郵便物を取りに来ただけと、立ち寄った我が家の様子を詩的な散文詩にして表現している。単身赴任の作者の家族への思いがよく伝わってくる佳品。

「春の障子」は、長女の二人目の出産を四月半ば過ぎに控えて、「庭ノツツジノ花ガ咲イテイルカナ、柿ノ木ノ芽吹キガ始マッテイルカナ」と思いを馳せ、何か出来ることはないかと考えて、黄ばんだ障子を張り替えた、という。「新年を迎える準備だよ」と妻にはいって「出産のことは口にしなかった」夫のひそやかな思いが頬笑ましい作品。

「畳のへこみ」<sup>を</sup>は、「学校から帰ると母の鏡台がなかった、弟のおもちゃがなかった、母と弟がいなかつ

た」という作品。その後は祖父母と自分との三人暮らしが始まり、時々、畳のへこみをこっそりさわっていた」という詩。淡々と書かれているだけに人のこころをうつ。

「オリオン座」は、寮生活の思い出が書かれている。五月の菖蒲湯のこと、七月の七夕の笹竹のことが書かれ、寮の風呂が修理で、隣り町の銭湯に行った日の「子ども夜まわりをしよう」と寮母から拍子木を預かっていた隆さんが「火の用心」（カッカ）「火の用心！」「焼餅やいても家焼くなあ！」（カッカ）と「村の夜警を真似してはゲラゲラ」が楽しい。

「寒立馬」は、青森に住む父と母。私の生まれた場所に、あの家に今もいる、という。屋根雪と玄関に庭、深い雪を帰省のたび雪かきを手伝う、という。青森に住む寒立馬は厳しい冬にも耐える屈強な体を持つ馬である。飛行機で窓外を見ると、窓外に黒いコートの女性が見送りに来ている。母が寒立馬のように立っていたと書く作品。

「津軽へ」は、病院のベッドで、「家へ行って来たけど誰もいなかった」という母。住んでいた家の思い出を呟いて息をとめた、と書く。

次に佳作十篇につき寸評を書く。

「ばあちゃんのスパゲティ」は、ばあちゃん家の定番スパゲティを通して楽しい思い出を書いている。

「地を掻け」は、勉強より農作業が大事という人生訓に父は字を書く事を大切だと書く。

「家」は、屋根に積もった雪のよう、窓を鳴らした風のような日々を書いていく作品。

「帰宅」は、「生きている時と変わらぬ寝姿」で帰って来た父の在りし日の姿と書棚を書く。

「市営団地へ、いざ」は、二十数年振りに行った市営団地の思い出をコンパクトに書く。

「杉っ皮の屋根に抱かれて」は、「この家は母ちゃんが居ないと家の中が奇麗だ」というエピソードなどを描いたユーモラスな作品。

「蝶の飛ぶ日」は、祖母の着物の模様にある夥しい数の蝶が舞う、と表現された作品。

「町のおい」は、一九九五年の地震で何もかもなくなってしまった。煎られた新茶の匂い、畳屋の青い蘭草の匂いなどを描いた作品。

「大きな藁屋根」は、戦後に帰った兵士や従軍看護婦などが目指した「大きな藁屋根」を詩情豊かに描いた作品である。

「ちゃぶ台」は終戦直後、家庭になくはならなかった「ちゃぶ台」を描いている。正油をかけた麦ごはん等当時の状況を書いている。

市民奨励賞は、推薦作品五篇の中から「音」、「渡り鳥」、「雀」の三篇が選ばれた。

「音」は、十七才（選考後に判った）の方の作品である。学校の部活動から帰って「ただいま」「おかえり」、私と母親との会話。その後、「トントントン」「グツグツグツ」母のがんばっている音。「ブルルル」「ボタン」仕事をしてくれている、がんばっている父の音。最後の「なにげない毎日に／たくさんの音があふれている／私の家は幸せな音でいっぱいだ」の三行が素晴らしい。

「渡り鳥」は、五世代続いた百年の家が十日で消えた、という。「隙間に潜んでいた年間の砂塵／渡り鳥の群れになり／道に 裏の川 近隣の家々の屋根に降り立つ」と書く。鬻を結った祖母、養蚕業の始動と終焉など家の歴史と生活が描かれた作品。

「雀」は一年振りに母の家を訪ねる。戸袋に雨戸をしまい、ガラス戸も開け放つ。勝手口を下りる。換気窓フードの上に雀の巣がある。今もこの家から旅立てる命がある。育てることが大好きだった母、まだまだここは母の家らしい、と書いている。



# 選考委員紹介

菊田 守 (きくた まもる)

昭和十年(一九三五年) 七月十四日生

東京都中野区出身

学生時代に安西冬樹の「春」に心動かされ、詩を書き始める。詩誌「花」、「鳥」同人。平成六年(一九九四年)十一月、愛知県豊橋市制定の第一回丸山薫賞を詩集『かなかな』(花神社刊)により受賞。著作として他に詩集『妙正寺川』、『白鷺』、『仰向け』、『雀』、新・日本現代詩文庫『新編 菊田守詩集』等、エッセイ文庫『夕焼けと自転車』など多数。

元日本現代詩人会会長、日氏賞代表、丸山薫賞選考委員、前橋「若い芽のポエム」選考委員、日本文藝家協会会員、日本ペンクラブ財務委員会委員。

東京都中野区鷺宮在住

木坂 涼（きさか りょう）

昭和三十三年（一九五八年）七月三十日生

埼玉県東松山市出身

新鮮でユニークな作風が注目を浴び、詩集『ツツツツと』で現代詩花椿賞、『金色の網』で芸術選奨文部大臣新人賞・埼玉文芸賞、『どこへ』で埼玉詩人賞を受賞。主な詩集に現代詩文庫『木坂涼詩集』、『ある日』など。

児童書の仕事も多く手がけ、翻訳絵本『どうするジョージ！』で産経児童出版翻訳作品賞受賞。エッセイ集『ペランダの博物誌』ほか。

朝日新聞埼玉版にコラム「木坂涼の本ともクラブ」、雑誌「どうぶつと動物園」に詩を連載中。埼玉文学賞「詩部門」、講談社絵本新人賞の選考委員も務める。

東京都板橋区在住





# 推薦委員紹介

北岡 淳子（きたおか じゅんこ）

昭和二十二年（一九四七年）一月三日生

長野県長野市出身

星野徹（詩人・英文学者）のもとで詩と詩論を学ぶ。詩誌「白亜紀」、後に「ERA」、「未開」、「同時代」、「微」に参加、現在に至る。著書には『冬の蝶（詩集収録作品より三善晃氏による女声合唱曲集「街路灯」出版）』・『生姜湯（日本詩人クラブ新人賞）』・『サンジュアンの木（埼玉詩人賞）』・『アンブロシア』・『鳥まばたけば（日本詩人クラブ賞）』他の詩集と『喪神の午後』・『荒川流域の文学』他の共著がある。日本詩人クラブ、日本現代詩人会、日本ペンクラブ、日本文藝家協会、埼玉詩人会、他会員。埼玉文芸賞選考委員、日本詩歌文学館評議員。

埼玉県入間郡毛呂山町在住

北畑 光男（きたばたけ みつお）

昭和二十一年（一九五八年）七月二十三日生

岩手県出身

詩誌「歷程」「撃竹」同人。村上昭夫研究「雁の声」主宰。

主な詩集に『救沢まで』（第三回富田碎花賞）、『死はふりつもるか』

（第十三回埼玉詩人賞）、『文明ののど』（第三十五回埼玉文芸賞）、『北の蜻蛉』（第十九回丸山薫賞）他五冊がある。

現在は日本現代詩人会理事、日本現代詩歌文学館理事、埼玉県立いたま文学館運営協議会委員、日本文藝家協会会員、埼玉詩人会会員、岩手県詩人クラブ会員、埼玉文芸家集団会員。選考委員・現代詩人賞選考委員、日氏賞選考委員、日本詩人クラブ賞選考委員等を歴任し、現在は農民文学賞選考委員、歷程賞選考委員、埼玉文学賞選考委員、羽生市・ふるさとの詩推薦委員。

埼玉県児玉郡在住

長嶋 南子（ながしま みなこ）

昭和十八年（一九四三年）十二月三日生

茨城県出身

日本現代詩人会会員、詩誌「きようは詩人」「Z é r o」同人。詩集『アンパン日記』で第31回小熊秀雄賞。詩集に『鞍馬天狗』『ちよつと食べすぎ』『シャカシャカ』『猫 笑う』『はじめに闇があった』ほか。

東京都足立区在住

山田 隆昭（やまだ たかあき）

昭和二十四年（一九四九年）一月九日生

東京都出身

十七歳のとき、親しかった一歳下の従兄弟を突然失い、詩を書く。二十代初めより詩誌「時間」「日本未来派」に投稿する。

詩集『風のゆくえ』（私家版）、『鬼』（私家版）、『うしろめた屋』（土曜美術社出版販売刊・第四十七回日氏賞）、『アンソロジー・山田隆昭詩集』（土曜美術社出版販売刊・前記の三詩集を収める）、『座敷牢』（思潮社刊）

詩誌「地平線」「花」同人。

日本現代詩人会、日本ペンクラブ、日本文藝家協会各会員、自治労文芸賞「詩」部門選者。

東京都江東区在住



資

料



## 経 過

実行委員会

募集企画の決定（平成二十七年五月）

第十回「ふるさとの詩」の募集題材は、「家」とし、全国募集を行うことを決定した。

募集要項・啓発方法の検討（平成二十七年九月）

募集開始（平成二十七年十一月）

全国の図書館、文学館および詩人団体、マスコミ等へ募集要項を送付し、啓発を依頼した。また、公募雑誌への掲載、市のホームページへの掲載により、啓発に努めた。

募集締切（平成二十八年一月三十一日）

推薦委員会（平成二十八年三月十三日）

あらかじめ配布した応募作品の中から、各推薦委員が優秀作品を選考して持ち寄り、推薦委員会を開催した。

審査の結果五百二十五篇の中から八十篇を、市民奨励賞対象作品九十五篇から五篇を推薦選考した。

選考委員会（平成二十八年四月十六日）

あらかじめ配布した推薦作品の中から、各選考委員が優秀作品を選考して持ち寄り、選考委員会を開催した。

審査の結果太田玉茗賞一篇、宮澤章二賞一篇、優秀賞五篇、佳作十篇、市民奨励賞三篇の合計二十篇を入賞作品として決定した。

入賞者発表（平成二十八年四月二十六日）

定例記者会見において、入賞者を報道機関へ発表した。

表彰式（平成二十八年六月二十五日）

入賞者、選考委員並びに推薦委員、歴代の大賞受賞者そして関係者の方々にお集まりいただき、表彰式を開催した。

# 第十回 ふるさとの詩

## 募集要項

心に描くあなたのふるさとを一篇の詩にして応募してみませんか。

### 募集作品

- ・ふるさとの「家」を題材とした未発表のオリジナル作品。
- ・作品数は一人1篇とします。

### 応募方法

- ・市販の400字詰め原稿用紙B4縦書、本文・表題で2枚以内の作品。  
(パソコン等のものは原稿用紙マスごとに印字してください)
- ・別紙に郵便番号・住所・氏名・年齢・性別・電話番号を明記してください。  
なお、ペンネーム使用の場合は、本名も書き添えてください。  
氏名には必ずふりがなをつけてください。
- ・選考結果通知のため、住所・氏名を記入し、82円切手を貼付した返信用封筒を必ず原稿と一緒に送ってください。

### 応募資格

- ・資格は問いません。ただし、中学生以下の方は除きます。

### 締切

平成28年1月31日(当日消印有効)

### 選考委員

菊田守・木坂涼

### 推薦委員

北岡淳子・北畑光男・長嶋南子・山田隆昭

### 発表

結果については平成28年4月下旬に通知。

### 賞

- 太田玉茗賞…(1篇) 賞状・盾・賞金30万円
- 宮澤章二賞…(1篇) 賞状・盾・賞金20万円
- 優秀賞…(5篇) 賞状・盾
- 佳作…(10篇) 賞状・盾
- 市民奨励賞…(3篇) 賞状・盾

### その他

- ・入賞作品の著作権は主催者に帰属し、作品は返却いたしません。
- ・二重応募はご遠慮ください。
- ・選考に関する問い合わせには応じられません。

### 主催

羽生市

### 応募・問い合わせ先

〒348-8601 埼玉県羽生市東6丁目15番地  
羽生市役所秘書広報課内『ふるさとの詩』募集実行委員会事務局  
TEL 048(561)1121(内線204) FAX 048(562)3500  
Eメール hisho@city.hanyu.lg.jp



# 第十回「ふるさとの詩」応募状況

## 1 男女別 / 年代別 [単位：人]

| 年代      | 男             | 女  | 計   |
|---------|---------------|----|-----|
| 10代     | 39            | 49 | 88  |
| 20代     | 3             | 7  | 10  |
| 30代     | 9             | 14 | 23  |
| 40代     | 21            | 33 | 54  |
| 50代     | 38            | 29 | 67  |
| 60代     | 61            | 56 | 117 |
| 70代     | 51            | 50 | 101 |
| 80代     | 38            | 14 | 52  |
| 90代     | 1             | 1  | 2   |
| 年齢不明    | 5             | 5  | 10  |
| 年齢・性別不明 |               | 1  | 1   |
| 総計      | 男266+女258+不明1 |    | 525 |

※最高齢92歳、最年少16歳

## 2 都道府県別 [単位：人]

| 県          | 人数  | 県    | 人数 | 県    | 人数 | 県   | 人数 |     |
|------------|-----|------|----|------|----|-----|----|-----|
| 北海道        | 27  | 東京都  | 37 | 京都府  | 9  | 高知県 | 1  |     |
| 青森県        | 11  | 神奈川県 | 30 | 大阪府  | 15 | 福岡県 | 14 |     |
| 岩手県        | 1   | 新潟県  | 8  | 兵庫県  | 17 | 佐賀県 | 2  |     |
| 宮城県        | 8   | 富山県  | 1  | 奈良県  | 1  | 長崎県 | 2  |     |
| 秋田県        | 1   | 石川県  | 4  | 和歌山県 | 3  | 熊本県 | 1  |     |
| 山形県        | 3   | 福井県  | 3  | 鳥取県  | 2  | 大分県 | 6  |     |
| 福島県        | 6   | 山梨県  | 3  | 島根県  | 1  | 宮崎県 | 1  |     |
| 茨城県        | 10  | 長野県  | 4  | 岡山県  | 4  | 鹿児島 | 2  |     |
| 栃木県        | 10  | 岐阜県  | 8  | 広島県  | 9  | 沖縄県 | 1  |     |
| 群馬県        | 6   | 静岡県  | 16 | 山口県  | 6  |     |    |     |
| 埼玉県        | 172 | 愛知県  | 23 | 徳島県  | 1  |     |    |     |
| (うち羽生市 95) |     | 三重県  | 9  | 香川県  | 4  |     |    |     |
| 千葉県        | 17  | 滋賀県  | 2  | 愛媛県  | 3  |     |    |     |
|            |     |      |    |      |    |     | 合計 | 525 |

実 行 委 員（五十音順）

塩田 禎子

根岸 光子

萩原 澄江

水野 栄子

---

第十回 ふるさとの詩 受賞作品集

発行 平成28年6月25日

編集 ふるさとの詩 実行委員会

発行者 羽 生 市

埼玉県羽生市東6丁目15番地

TEL 048-561-1121（代）

---